

| | |
|---|---|
| だ | 美 |
| よ | 術 |
| り | 館 |

contents

| | |
|-------------------------------|-------|
| 土田ヒロミのニッポン | [2~3] |
| 都市化・バブル・新世紀・まつり・ヒロシマに見る時代と人々。 | |
| 新収蔵品紹介 | [4~7] |
| お知らせ・貸館情報 | [7] |
| 近隣美術館・博物館スケジュール | [8] |
| 日本まんなか共和国 | [8] |

〈表紙:「土田ヒロミのニッポン」展より 続・俗神「花祭り」(朝鬼) 愛知・東栄 1983〉



Tsuchida Hiromi's
Nippon

Times and People:
Urbanization, the bubble, the millennium,
the festivals, Hiroshima

Tsuchida Hiromi's Nippon

Times and People:
Urbanization, the bubble, the millennium,
the festivals, Hiroshima

都市化・バブル・新世紀・
まつり・ヒロシマ・に見る時代と人々。

土田ヒロミの ニッポン

2008年5月2日(金)～25日(日) 休館日/5月12日(月)
開館時間/午前9時～午後5時 金曜日は午後8時まで (入館は閉館30分前まで)
主催/福井県立美術館、福井新聞社 共催/南越前町
後援/福井市、福井市教育委員会、越前市、越前市教育委員会、FBC福井放送、
福井テレビ、FM福井
企画協力/東京都写真美術館
観覧料/一般700円・大高生500円・中小生300円 ※30名以上の団体は2割引
[前売り] 一般600円 (5月1日まで販売)

土田ヒロミは福井県南越前町出身の日本を代表する写真家です。1960年代末から、日本の土俗的な文化、ヒロシマ、高度経済成長、バブル経済などのテーマを通して、変貌する日本の姿を撮り続けています。そのユニークな視点と斬新なスタイルは、写真表現を大胆に切り開き、これまでにない日本の時代と人々を表現してきました。本展では氏の写真作品の軌跡を通して、あらためて日本の現代史をみつめ、日本人を考えます。

◇関連イベント

「土田ヒロミのギャラリートーク」

- 5月6日(火・祝日) 午後1時30分～
 - 5月18日(日) 午後2時～
- ※要チケット

「土田ヒロミの写真教室」

- 5月6日(火・祝日) 午後3時～
- 写真作品を何枚でも持参ください。
土田先生が優しくアドバイス。
初心者からベテランまで大歓迎!

参加
無料

◇同時開催 所蔵品によるテーマ展「新収蔵品紹介part2」

Part I 日本人

「俗神」—過去に繋がる私— (1968-1975)

1968年から75年に、日本各地を撮影取材。71年、フリーランスになる際、まず自分自身を検証しようと、日本の土俗に向かっていったなかから生まれた作品である。日本の古い宗教的な空間や祭りの空間—富士山、伊勢神宮、吉野、青森など土俗的かつ時代をまたいで継承した文化、人々を捉えた。



「砂を数える」—高度成長都市化する私— (1975-1989)

1975年から89年までに日本各地で撮影された日本人の群集としての姿。首都圏を中心に撮りためたシリーズで、福井の山村を離れ、都市化していく自分自身の存在のありようを対象化する試みから進められた。日本人が、80年代前後の時期、どのような機会に「群集」を成しているのか見て取ることができる。



「パーティー」—バブル経済踊る私— (1980-1990)

1980年から90年まで、バブル経済に沸く日本の異常ともいえる一時期に、当時どこかしこで開かれていた「パーティー」。ハレの舞台に、華やかな衣装で身を包み、派手なメイクとヘアスタイルで夜な夜な出没する人々の姿を捉えている。「俗神」「砂を数える」に通ずる、日本の群れの姿・本質といったものがここにも表されている。



「新・砂を数える」—新世紀Fake化する私— (1995-2004)

「砂を数える」のカラーによる続編。日本のバブル経済が一旦に崩壊していく中、時代のバーチャル化様相を考察している。一つのベクトル方向に動かず、互いに距離を取って群れる姿から、以前の「群れ」の形が確実に変質してきていることを如実に捉えている。デジタル技術を採用入れ、予測不能の現代像を展開している。



「続・俗神」—日本のまつりを記号化— (1980-2004)

「俗神」の続編として、祭りをカラーで制作。祭りの形を記号的に捉える。民俗学的な分類より、形のおもしろさに重点が置かれている。大判フィルムを使用して、スタジオ・ポートレイトのスタイルを戸外で実行。形はかわっても断絶せずに続いてきた日本人文化の厚み、日本人文化の多様性を伝える。



「ヒロシマ三部作」

1973年頃より手がけた3部作。被爆体験記『原爆の子』(1951、岩波書店)に出会ってから、数年かけて30-40代になった原爆の子の消息をたどり107人に取材した「ヒロシマ1945~1979」。さらに原爆遺跡を記録した「ヒロシマ・モニュメント」。広島平和記念資料館の遺品、原爆資料の記録した「ヒロシマ・コレクション」へと続く。



「ヒロシマ1945~1979」(1976-1979)より



「ヒロシマ・コレクション」(1982-1994)より

「Aging」—時間を巡る私— (1986年7月~)

1986年から毎日、自分の顔を記録として撮りはじめる。自分の老化に気づいたことが作品制作のきっかけとなった。老人社会や老化の問題を考えると、老人ホームの人たちを撮るありきたりのやり方ではなく、セルフポートレイトを定点観測的に撮影する方法を考え出し、現在まで続けられている。



「ヒロシマ・モニュメント」(1979-1983)より

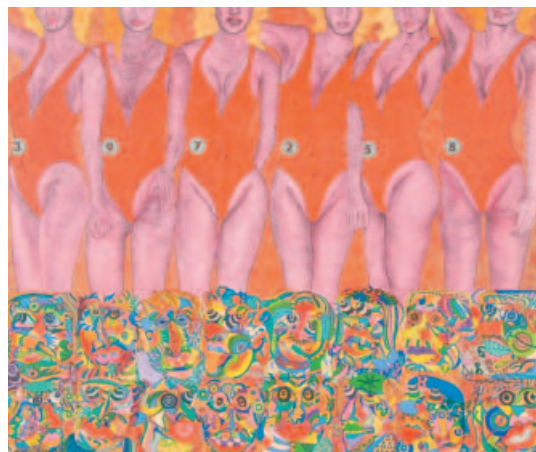
平成19年度

新収蔵品紹介

福井県立美術館の平成19年度新収蔵品をご紹介します。19年度は、寄贈により6点、保管転換により5点の新収蔵品がありました。またこれ以外に45点の寄託がありました。

これらの作品は4月4日(金)から27日(日)まで開催されるテーマ展「新収蔵品紹介 part1」と、5月2日(金)から25日(日)まで開催される「新収蔵品紹介 part2」で紹介されます。

以下これらの新収蔵品の御紹介をいたします。



1.



4.

◎洋画

松崎鐘美作 (寄贈)

1.「ヤング ギャル コンテスト」

1989年(平成元年) / 162.0×194.0cm / 油彩、カンバス

2.「港のBAR」

1980年代後半(昭和60～平成元年) / 130.3×162.1cm / 油彩、カンバス

3.「無題」

制作年不詳 / 112.2×145.5cm / 油彩、カンバス

松崎鐘美は1949(昭和24)年に福井市で画家松崎真一の三男として生まれました。父真一は独立美術協会会員で、福井の近代洋画史の中で最も重要な画家の一人です。鐘美も独立展に計20回出品しています。その他多数の個展や、グループ展に出品して、

その画家としての地位を確かなものにしてきましたが、惜しくも2005(平成17)年に56歳で亡くなりました。

今回寄贈された作品は、彼の没後2年目に、彼の画歴を惜しんで有志一同によって福井市美術館で開催された「松崎鐘美遺作展」に出品されたものです。

抽象から具象、線や色面を多用した表現からモノトーン表現等、多様に変遷した彼の画業の中でも、大胆な構図、カラフルな色面、繊細な線描写を用いて、モチーフをユニークにまたシニカルな視点で描いたこれらの作品は、鐘美の最も充実した時期の作品であり、彼の独自性が感じられる作品といえます。

馬越祐一作 4.「しゃこ貝のある風景」(保管転換)

1950(昭和25)年～1963(昭和38)年 / 72.5×90.5cm / 油彩、カンバス

馬越祐一(1902～1968)は、愛媛県の伯方島に生まれ、広島



2.



3.



5.



6.



7.

教員養成所を終了したあと、福井県武生中学の英語教員として赴任以来、生涯を武生の地で送った画家です。30才頃から絵を描き始めました。団体展には所属せず、個展等の発表も数多くはありません。しかし麻生三郎から高く評価され、誘われて共に展覧会を開催しています。また他に寺田政明や井上長三郎等との深い交流は生涯続きました。県立美術館でも、福井県洋画史の中で重要な位置づけを持つ画家として、1983年には小規模ながら個展を開催しています。

本作は、1963年の東京銀座、昭和画廊で個展に出品した作品で、砂浜の上に置かれたしゃこ貝や壺等のモチーフ、点描風の筆致や静謐で夢想的な画風が最盛期の彼の作品の特徴をよく表しています。

上出穂美作 (保管転換)

5.「名土」

1950年代/162.1×97.0cm/油彩、カンバス

6.「ゴージュ (作品)」

1956 (昭和31) 年頃/162.1×97.0cm/油彩、カンバス

7.「無題」

1950年代/162.1×97.0cm/油彩、カンバス

上出穂美 (1917～1993) は福井県に生まれ、教員をしながら制作を続けてきた洋画家です。1940年の第10回独立展に初入選以後、1982年の第50回展まで、第40回の不出品 (滞仏中による) を除き全回独立展に出品・入選している画家です。

今回保管転換となった作品は3点とも30代の作品ですが、上出はこの時期、プル・ブルー賞を受賞 (1955年第23回独立展) したり、独立賞を受賞 (1956年第24回独立展) するなど、重要な賞を連続して取っており、まさに画家の最盛期の作品といえます。

◎日本画

山本大慈 「孔雀」 (保管転換)

1964 (昭和39)年 / 185.0×233.0cm / 岩絵の具、金箔、紙

山本大慈 (1908～1987) は福井県美浜町に生まれ、関西を中心に活躍した院展作家です。福井県では唯一人の日本美術院所属の作家で、昭和8年、25歳のとき再興院展で初入選を果たした後、院展のみに出展をし、花鳥画を得意とした画家です。

本作は、2羽の羽根をたたんだ雄の孔雀が上下に互い違いで配置され、背景の金箔地が彼らを華麗に際立たせている図様です。彼は50代半ばから後半にかけての一時期、孔雀を扱った作品を多く描いておりますが、本作もそのうちの一点で、1964 (昭和39)年の再興第49回院展に出品した作品です。



◎版画

棟方志功作 「工楽頌両妃散華の柵」 (寄贈)

1951年 (昭和26年) / 67.5×49.0cm / 木版画、紙

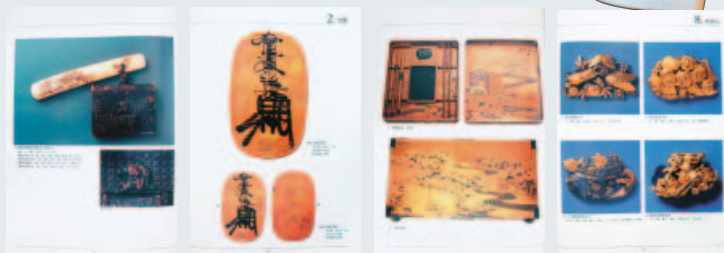
棟方志功は1945 (昭和20)年から1951 (昭和26)年までの6年間富山県の福光に疎開します。志功は富山の風光や人々を愛し、富山の人々もまた志功を温かく受け入れたようです。しかし志功の心の交流は単に富山にとどまらず福井にも広がったようです。疎開中の1948 (昭和23)年6月28日に福井大震災が起り、福井市を中心に大きな被害が出ますが、志功はたった5日後の7月3日には「福井大震災救援棟方志功小品板画展」を開催しています。福井県内では志功との交流から入手されたと思われる版画作品が時々見受けられますが、本作品もこのような交流のなかから福井にきた作品のひとつで、福光時代の最後の年に作った作品です。



好評
発売中

岡島美術財団の図録

「細密工芸の美 岡島コレクション」は、美術館で4,000円で販売しております。



◎工芸



作者不詳 「梅樹文真形釜」 (寄贈)

江戸時代(17世紀) / 口径12.4、胴径28.0、高19.0cm / 鉄・铸造

口の立ち上がりやや高く、肩を張りぎみにした真形の釜で、鋳付を鬼面とし、なめらかな挽肌の胴部には梅と松とされる二つの樹木が浅く篋押しで表されています。

本作の持つ特徴は越前芦屋釜の特徴といわれます。越前芦屋釜は芦屋釜の一分派で、武生の五分市や敦賀の鋳物師にて制作された茶湯釜を指します。室町時代に筑前芦屋釜の影響を受けて製作されたと伝えますが、その実態は謎に包まれています。本作はおおむね越前芦屋の特徴を備えつつも、一方で異なる表現も見られることから、芦屋釜と越前芦屋釜の系譜を考える上で意味の有る作品といえます。



木村盛和作 「油滴木ノ葉釉茶盤」 (寄贈)

1975～1980年(昭和50年代前半) / 口径13.7cm×底5.5cm×高6.5cm / 陶器

木村盛和は長い間京都で活躍し、50代半ばで福井に移住築窯した作家です。木村盛和は中国宋時代に焼かれた天目茶碗の技術の研究を長年行い、そこに彼独自の表現を探り続けてきています。作陶を始めた昭和12年から、商工省所管国立陶磁器試験所の職員として鉄釉(天目釉)の調査を行う際にも、記録文献もないまま各地の鉄を含む天然の岩石や鉱物を自ら採取・調査し、日本における鉄釉の可能性を探り、焼き方の工夫を重ねてきました。

本作品はこのような長年の研究のなかで生み出された作品で、作者が得意とする鉄釉の作品の一つとして特徴がよくあらわれた作品といえます。

お知らせ

◎5月～8月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、**5月1日(木)、5月12日(月)、5月26日(月)～29日(木)、6月16日(月)、6月30日(月)、7月1日(火)～4日(金)、7月7日(月)、7月14日(月)、7月28日(月)～8月1日(金)、8月25日(月)～31日(日)**は、休館とさせていただきますのでご了承ください。

貸館情報 [5/2～6/29]

| | | |
|----------------------------|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 5/ 2～5/ 5 ● 第15回移山会書作展 | 6/ 5～6/ 8 ● 第56回全国ろうあ者大会 in福井 特別展 | 6/19～6/22 ● 第23回沙久羅会日本画展 |
| 5/ 7～5/11 ● 第8回フォト瞬写真展 | | 6/19～6/22 ● 藤の世界—小木史代 |
| 5/16～5/18 ● 第36回書法研究石門展 | 6/ 5～6/ 8 ● 第10回記念福井水墨画壇 「こころ・趣味」 | 6/19～6/23 ● 第61回示現会巡回福井展 |
| 5/22～5/25 ● 第10回創作「趣味の表装展」 | | 6/25～6/29 ● 第34回福井県水墨画協会展 |
| 5/30～6/ 1 ● 第17回紫陽花展 | 6/ 6～6/ 8 ● 福井ささなみ会20回記念展 | 6/25～6/29 ● 第7回ひろの会日本画展 |
| 5/30～6/ 1 ● 喜寿記念天谷淳三郎絵画展 | 6/ 6～6/ 8 ● 福井県立藤島高等学校美術部展 | 6/26～6/29 ● 第44回福井造形展 |
| 5/30～6/ 1 ● 第3回笑夢の会水彩画展 | 6/12～6/15 ● 第58回県書道展・県現代書作家展 | 6/27～6/29 ● 第34回福井県デザイン コンクール作品展 |
| 5/30～6/ 1 ● 第11回遊和会展 | 6/18～6/22 ● 第24回福井県写真作家連盟展 | |

※7月は第39回日展福井展(7/5～7/27)が開催されます。

福井県立歴史博物館

福井市大宮2-19-15 TEL.0776-22-4675
休館日:第2・4水曜日

シリーズ・人と色の歴史 「あお」
4月26日(土)~6月8日(日)

長い歴史のなかで、人びとは、さまざまな色で暮らしを彩ってきました。青・赤・黒・白…それぞれの色は、その色ならではの特性を持っています。
今回は「あお」がテーマ。青い顔料や染料の藍を中心に、「あお」の色の不思議と色の性質と魅力を物語るさまざまな資料を紹介します。

一般 400円/高大生 300円/小中生・70歳以上 200円 ※30名以上の団体は2割引き

福井市立郷土歴史博物館

福井市宝永3-12-1 TEL.0776-21-0489
休館日:6月16日(月)、7月7日(月)、7月8日(火)

「福井城跡発掘展」 福井城跡の発掘調査成果から福井市街地の歴史を紹介します。
5月23日(金)~7月21日(月)

入館料:未定

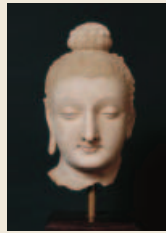
松平家史料展示室
銀細工の小箱 ポンポニエール
5月9日(金)~7月6日(日)

皇族・華族家慶事の記念品「ポンポニエール」。繊細な銀細工の小物入れの数々を展示します。

個人 210円/団体 150円 ※団体料金は20名以上で観覧される場合に限り。

福井市美術館 [アートラボふくい]

福井市下馬3-1111 TEL.0776-33-2990
休館日:月曜日(祝日の場合は火曜日)、祝日の翌日



《仏頭》4-5世紀 個人蔵

ガンダーラ美術と
バーミヤン遺跡展

5月28日(水)~7月6日(日)

パキスタンについて多くの優れたコレクションがある日本国内の優品を展示し、ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡を体系的に紹介します。

一般 1,000円/高大生500円/小中生 200円
※20名以上の団体は2割引き

ボックスアート展

7月19日(土)~8月31日(日)

昭和30年代初頭に登場したプラモデルは、これまで多くの子供達の夢を育んできました。本展はプラモデルキットの箱に描かれた絵、ボックスアートの原画を紹介する初めての大規模な展覧会。プラモデル誕生以前のソリッドモデル(木製模型)や紙模型、草創期から現在の製品等を展示し、プラモデルという戦後の大衆文化の興味深い一面を紹介します。

一般 900円/高大生600円/小中生 300円
※20名以上の団体は2割引き



「タミヤ 1/12 ビッグスケール Honda F-1」1967年 川上恭弘

広
報
板

日本まんなか共和国

日本の東西文化の境界にある四県(岐阜、三重、滋賀、福井)が連携し、より効果的な文化活動を行うため、先進的な「日本まんなか共和国」の創造を目指しています。

滋賀県立近代美術館

大津市瀬田南大萱町1740-1 TEL:077-543-2111

鉄の釉薬を究めた陶芸家
人間国宝・清水卯一作品展

4月12日(土)~5月18日(日)

琵琶湖を望む工房で、鉄釉陶器のたゆまぬ研究と創作を続け、人間国宝に認定された陶芸作家・清水卯一(1926-2004)。確かな伝統技術と豊かな創造力による芸術の変遷をわかりやすく紹介します。



《蓬葉掛分蓋》

一般 750(550)円/高大生 500(400)円/小中生 300(250)円
※()内は前売および20名以上の団体料金

ブルーノ・ムナーリ展

5月31日(土)~7月6日(日)



《どうぶつはいかがい》モンダロー社

絵画、デザイン、美術教育など多岐にわたる分野で活躍したイタリアのデザイナー、ブルーノ・ムナーリ(1907-1998)。生涯がかかわりつづけた「本」の仕事を手がかりに、初版の書籍、未来派時代の油絵やスケッチ、絵本の原画、実験映像など、約300点の作品を公開します。

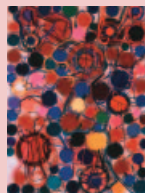
一般 950(750)円/高大生 650(500)円/小中生 450(350)円
※()内は前売および20名以上の団体料金

岐阜県美術館

岐阜市宇佐4-1-22 TEL:058-271-1313

所蔵品による特別展示
田口コレクション展Ⅰ 現代の美術
この30年、何が探求されてきたか?
On Existence—在ることのあ・かし

3月11日(火)~5月11日(日)



田中数子「83B」1983

今回の展覧会は、田口コレクションの内容と魅力を紹介する第一弾として、現代美術の作品群を一堂に展示するものです。

日本と西洋の11名の作家が、主に1970年代から90年代初めにかけて発表したこの作品群は、様々な探求と革新を示しています。これまでの美術を根本

から見直し、新しい造形と表現を打ち出してきた活動は、現代の人間と表現活動をめぐる切実な問題意識に基づいています。それは特に、私たちが物事の不透明さなどに不安を覚えるこの時代に、自分と周囲の世界について、確かなものをつかみ、形にしようとすることに関係していると言えるでしょう。

現代にふさわしい新しい価値観を生み出そうとチャレンジする芸術家たちの、インパクトある作品との出会いは、様々な発見の機会となることでしょう。



金子潤「無題 (#105)」1985

一般 320円(260円)/大学生 210円(160円)/小・中・高生無料
※()内は、20名以上の団体料金。

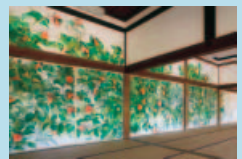
三重県立美術館

津市大谷町11 TEL:059-227-2100

金刀比羅宮 書院の美
~応挙・若冲・岸岱から田窪まで~展

4月26日(土)~6月8日(日)

こんびらさんの名で知られる香川県琴平町の金刀比羅宮に伝わる円山応挙、伊藤若冲の障壁画、高橋由一の油彩画など金刀比羅宮を代表する文化財、田窪恭治による現代の障壁画などを紹介します。また、若冲が金刀比羅宮奥書院に描いたといわれる幻の障壁画断片《飛燕図断片》(定蓮寺蔵)も特別公開いたします。



田窪恭治「椿書院障壁画」2005~2007年

一般 1,000円(800円)/高大生 800円(600円)/小・中生500円(300円)
※()内は、20名以上の団体料金

没後80年 佐伯祐三展

6月29日(日)~8月17日(日)

パリの街角を描いた作品で知られる天折の画家、佐伯祐三の没後80年を記念して、代表作約90点と佐伯交流の画家たちの作品を紹介します。



佐伯祐三「広告(ヴェルダン)」大塚美術館

一般 900円(700円)/高大生 700円(500円)/小・中生400円(300円)
※()内は、20名以上の団体料金